〈共に在ること〉の不思議

古東哲明

一　現代存在論の最前線

まだ、若葉が萌えはじめる前だったでしょうか。

いま、たいそう深いお話をしてくださった安藤文雄先生から、なんか話しをしないか、とのお誘いをうけました。西洋哲学を学んでおります文字通りの門外漢。場違いじゃないかと案じられたのですが、見知らぬ方々と、こうして出会うことの悦び。そちらに気持ちがひきずられ、あつかましくも、大任をお引き受けしたという次第です。

「見知らぬ方々と出会う」。そう申しました。たったそれだけのことが、じつは決定的なことではないか。そう考えております。こうして、なぜか分かりませんが、生まれて、生きて、死んでいくぼくたちの儚い存在ですが、しかし、ただそれだけで終わっているのではない。必ず誰かとあるいは何かと、「出会って」おります。暫しの間ですが、どなたかと、あるいはなにものかと、いやでも不断に、《共に在る》わけです。その、共に在るということ。考えたら、これは凄まじいことではないか。いってしまえば奇蹟。とてつもない神秘。新しい時代のエチカまで展望させてくれます。仏教をご研究なさっておられるみなさんからすれば、ごく当然のことかもしれませんが、現代の存在論は、なにかやっとそんなところに、たどり着いたように思われます。今日はそんな《共に在ること》の凄まじさをめぐっ

て、現代の存在論をご紹介しながら、つたない話をさせていただきます。

「共に在ること」が奇蹟だということは、そもそもなにかが《在ること》そのことが奇蹟だということから、必然的に導きだされます。そこでまず、唐突ではございますが、雲。空にポッカリ浮ぶあの雲。この雲の話からさせていただきます。

雲の存在は、ふしぎです。と申しますのも、雲は刻一刻、その形を失うそのことがそのまま同時に、形と成ることにほかならないからです。つまり、自己崩壊が自己形成と同時進行するようにしてしか、雲は一瞬たりとも、空に浮かんでいないからです。

たえまなく姿をかえるという、ただそれだけの外見印象を言っているつもりはありません。消滅することが同時に現れることであり、在ることが同時に無くなることであるというしかたでしか存在できない雲の在りようを、いま指摘しているつもりです。

消滅と出現、死と生、不在と現前、無と存在、終末と創造。これらは普通ですと、たがいに矛盾しあう反対概念とみなされます。同時ではありえません。ですが雲のばあい、そうした矛盾しあうものどうしが、同時に進行してしまうわけです。ゲーテ風にいえば、「死して成れ」(『西東詩集』)の言葉どおりに、雲は流れていくわけです。

これはじつは、雲だけにかぎった話ではありません。雲をみている当のわが身、つまり身体がすでにそうです。約六〇兆個の細胞が刻一刻、織りあげますこの身体もまた、新陳代謝という生物学的なかたちをとりながら、刻一刻の死滅と引換えに、その刻一刻の新たな生誕へ、振り替えられているからです。もうすこし丁寧に申しますと、寸前の身体組織を一挙に失うそのことが同時に、新しい身体組織の獲得となる、あるいは逆に、新しい身体組織の獲得を代償にして、その身体組織の崩壊を兌換する。この、死滅と生誕との同時進行現象としてしか、身体は一瞬たりとも存在できないということです。つまり、刻一刻、死滅が生命を贖い、その生命が同時に死滅を兌換するという、「死と

生」あるいは「無と存在」との奇妙な同時同一現象が、ほかならぬぼくたちの身体のありようだということです。

のみならず、アイソトープ現象――これは物体を構成する各原子がそれぞれ刻一刻生滅しているという現象ですが――が科学的に証明してくれますように、今日の科学の立場からしましても、森羅万象が刻一刻、生成消滅を繰り返していきます。いうまでもなく、これは、諸行無常、生死輪廻、あるいは古代ギリシア哲学でいうパンタ・レイ（万物流転）にほかなりません。在りとし在るすべてのものが、死と再生（あるいは生と再死）との奇妙な同時同一性のなかに、混成しています。一瞬たりとも同一状態――これを哲学では「A＝A」の同一律といいます――をたもつようなものは、この世に存在していませんし、存在できません。存在できているのは、刻一刻に無くなっているから（つまり死んでいるから）ですし、刻一刻無くなること（つまり死）が、同時に存在すること（つまり生）と表裏するからです。現に、一時間前の皆さんは、もうこの瞬間にはいません。と、言っているうちにまた、一瞬前のわたしたちは無くなって、いまこの瞬間のわたしたちに転生しています。毎瞬間に死んで、毎瞬間に生まれなおしているといっていいわけです。

ここのところを、フランスの小説家ル・クレジオなら、「僕は死んでいる、生きている、死んでいる、生きている。何百万回も死に、そして同時に生きている」（『物質的恍惚』二三八頁）なんていうところです。

森羅万象に例外なく貫通します同一律違反のこの奇妙なありよう（あるいは無くなりよう）を、「綺麗は汚い、汚いは綺麗」というシェークスピア劇『マクベス』冒頭の魔女の台詞にならって、「在るは無い、無いが在る」と、あるいは簡単に「存在：無」ということにいたしましょう。

さて、雲のはなしから、奇妙な存在論に行き着いてしまいました。ですが、これが、現代哲学の最先端の洞察にほかなりません。そのことを、現代存在論の先駆者であるハイデガーは、「存在と無は同一」（Sein: Nichts: das Selbe）と申します（全集一五巻、三六一頁以下）。現在、フランス哲学を代表しますレヴィナスもまた、「現前と不在、存在と

無の二者択一のいずれにもおさまらない〈別のカテゴリー〉」(Lévinas, E., Totalité et Infini, p. 209) として、森羅万象が〈在ること〉を考えます。だからかれは、万物の存在様式を、たとえばこんな風にひかりの輝きにも譬えるわけです。

「きらきら瞬く光、そのきらめきがあるのは消えるからこそであり、それは在ると同時にまた無いのだ」

(De l'existance à l'existant)

ギリシア出身の現代哲学者カストリアデスもまた、「存在、つまり形の創造即破壊という異様なものの出現」(Castoriadis, C., Le momde morcelé, 1990, p. 289) と申しております。在るのに無い。創造の時なのに同時に終末の時。まるで一瞬の花火のような存在論です。ですが、こうした奇妙な存在論を踏まえることで、おそらくはじめて、《共に在る》ことの凄さ、ひいては、今日では風化した観のある〈愛〉とか〈慈しみ〉という言葉を、なんの衒いもなく率直に、クリアーに、そして最も重要な事柄として、語ることができるようになるかと存じます。そこでいますこし詳しく、「存在・無」という奇妙な考え方にこだわっておくことにいたします。

二　底は底なし

「存在・無」というとき、厳密には二つのことが示されています。(1)存在の無根拠性（底は底なし）と、(2)存在の非在化性（在るは無い、無いが在る）が、それです。

存在の無根拠性（底なし）とは、文字どおり〈底がない〉ということです。〈底・無根拠〉とはむろん、ultima ratio Rerum（この人生や世界の究極的な拠り所・第一次的な存在理由・根拠・意味・目標・価値）のことです。そのような〈底〉が欠落しているというのが、「存在の無根拠性」です。そこに引いたボードレールの詩が端的に示しますとおりの、まずはおぞましい真実を言い表しています。

「げに！　一切は底なし、――行為も、欲望も、夢想も、言葉も！……
高みにも低みにも、いたるところ、奈落、荒磯、
静寂、心まどわす恐ろしき虚無あり」

（ボードレール『悪の華』「底無し」）

言葉は大層ですが、どなたも青い懐疑の日々に身に覚えのある、あのイヤなニヒリズムの思い。もはや現代人の常識。詳細な説明は無用でしょう。ただ、次のことはいっておかなければなりません。ぼくたちは通常、存在の無根拠性を、なにか否定的なこと、暗く不幸な惨事のように思ってしまいがちです。しかし実はそうではありません。むしろ逆です。存在は無根拠（底なし）だから、だからこそ存在は途方もなく根底的なことだということになります。そのあたりの機微を、シェイクスピアなら、「底は底無し」（Midsummer-Night's Dream, IV-1）というところでしょう。つまりこういうことです。

たとえば瓶の底をお考えください。瓶の底は、瓶全体を支える土台です。ですが、土台をなす瓶の底それ自体に、底などないでしょう。もし、瓶の底の内部か下部かどこかに、それを支える〈さらなる底〉があるなら、その〈さらなる底〉が本当の底になり、もはや瓶の底は、底とはいえなくなるからです。だからもし、なにかが底（根拠）をなすものなら、その底自体は底無し（無根拠）でなければ、論理的にも事実としてもおかしなことになります。

存在の場合にも事情はいっしょです。存在が無根拠だということは、存在が根底的なことだということに他ならないということです。ひらたくいえば、森羅万象が存在していることにはいかなる拠り所（究極的な根拠・理由・目的等）も欠落しておりますが――このことはどうしようもない真理ですが――、しかし拠り所が欠落しているからこそ、森羅万象が在ることそのことは、なにか途方もなく根底的なこと（拠り所となること）あるいは量りしることができないほどの光明（無量の光）だということです。だから、さきにのべましたハイデガーは、「存在と根拠は同一。だから存在は無根拠」（Satz von Grund S. 93）とか、「存在が根底として現成するかぎり、存在自体はいかなる根底もも

たない」(185) とか、「存在と底とが同一であるかぎりで、存在は無根底である」(185) といったパラドクシカルなテーゼを綴るわけです。

では無根底の存在が、どんな意味で根底的なことでしょうか。そのことはつぎの「存在の非在化」を述べることで、明らかになってきます。

三　滅びのなかの生成

これについては、すでに雲の事例をとりあげて述べましたが、ハイデガーも偏愛する炎の事例をとりあげ、あらためて述べることにします。ハイデガーはこう申します。

「火のなかには、照らし、明々と燃焼し、燃え上がり、ある拡がりをひろげるものの動勢(A)がある。けれどまた同時に、使い尽くし、みずからの内に打ち砕かれ、崩れ落ち、籠もり閉ざし、消え去るという動勢(B)もある」

(GA. Bd. 55., S. 161)

つまり、一方で点灯し燃え上がるベクトル（A）と、他方で燃え尽くし消え去るベクトル（B）、そのふたつの互いに真反対の動きのなかではじめて、炎は存在できているということです。現代の物理科学の用語をつかってもうしますと、エントロピー（消滅・解体・冷却化＝非在化）と、それに抗うネグエントロピー（熱化、集結、組織化＝在化）、このたがいに排除しあう二つの動性の同時進行現象としてのみ、炎は燃えているということ。後者が欠ければ炎の定常状態（ステディ・ステイツ）が破綻し、ヴーァと燃え上がってしまいますし、前者が欠ければそもそも炎が発火しません。いわば消えながら燃える、燃えながら消えるというパドックスのなかで、炎は燃えていることになります。

さて、森羅万象はすべからく酸素燃焼運動。ですから、必然的に、万物の存在は、こうしたエントロピーとネグエ

ントロピーとの奇妙な混成現象ということになります。奇妙なことになってまいりましたが、みなさんよくご承知の二種生死の構図をかりて整理すればじつに単純なはなしです。

二種生死論とは、二つの存在観であり時間論です。それぞれ、「分段生死」と「不可思議変易生死」ともうします（細かく言えば、前者が三段階、後者が四段階、あわせて七区分されますが、煩瑣をさけ二大区別だけのべる）。

分段生死は、①リニア時間（流れる時間＝時がまるで連続して経過すると考える通常の時間観念のこと）を構想し、②その直線上の別々の二つの時点に生誕と死滅を設定、③その二時点間に経過する時の流れをそのまま、人生とか万物の存在過程と重ね合わせます。　この立場では、死と生、非在化と在化は、別々に分段され、非在（無）と存在とは別々の期間を形成する。まず、オギャーと生まれる生誕以後、まるで延べ棒のような「在だけでできた一本道」が続き、いつの日か、死という未来の出来事が、どこか人生の外側からやってくると考えるわけです。だから〈存在〉とは、その分断された生誕と死との中間地帯のことを意味します。なんのことはありません、通常わたしたちが普通に思い描きます存在論、あるいは生死論のことです。

さて、現代哲学でも、また仏教本来の立場においても、こうした分段生死の存在論は、否定されます。すでに、雲や身体や炎の事例が示していますように、一方で生が死を振り出し、他方で死が生を兌換するというのが、森羅万象の存在のリアリティだからです。ここでは、生と死とが、常識（思議）を越えた仕方で、しかも目にも止まらぬ速さで変容しあうので、不可思議変易生死というわけです。

分断生死が、流水のイメージで考えられるのに対比していえば、噴水のイメージになりましょう。噴水は、落ちてるのに昇るというか、昇っているのに落ちるというのか、その上昇する水と落下する水とのアワイに、現象しているからです。

ハイデガーは「滅びを生まれとして、往くを来るとして、一つにおいて考えること」、とか、「滅びのなかの生成」

とか、「不断の創造にして崩壊」（ständige Schaffen und Zerstören）ともうします。仏教――念頭にはダルマキールティーが典型としてありますが――では、こうした考え方を念々起滅論と申します。つまり、森羅万象（宇宙）は、毎瞬が崩壊にして同時に創造とみる存在論です。別段、仏教固有の特殊な考え方ではありません。イスラム教〔とくにスーフィーの人たちはハルク・ジャディード（創造不断）と申します〕や、その外にもみられることです。たとえば、

「生きることは死ぬことで、死ぬことは生きること。死は生で、生は死。生は死ぬためにあり、死は再生するためにある」

（バロック期の詩人ティモテ・ド・シャック）

「生が死のなかに生き、死が生のなかに生きている」

（シェイクスピア『ルクリース凌辱』）

「成るは毀つ、成ると毀つと無く、複通して――」

（『荘子』斉物論編）

「いまだ生をすてざれどもいますでに死をみる。いまだ死をすてざれどもいますでに生をみる。生は死を罫礙するにはあらず。死は生を罫礙するにはあらず。……生は一枚〔在だけでできた一枚板〕にはあらず。死は両疋〔生と別々の項目〕にはあらず。死の生に相対するなし、生の死に相待するなし……去来を参學するに、去に生死あり、来に生死あり、生に去来あり、死に去来あり」

（道元『正法眼蔵』）

「人間は在るやいなや、すでにもはや無い、存在していないのである……人間という生物は、在ると同時にまた、存在しないのでなければならない。人間は存在者にして非在者である」

（ハイデガー全集五二巻、S. 111f.）

四　反転の論理

さて、存在の無根拠性と念々起滅性がわかったからといって、いったいそれがなんでしょうか。わたしたちがこうして生きて在ることの、儚さ・虚しさ・拠り所の無さを、ことさら炙りだしただけではないか。おなじみの現世虚仮（イマーゴ・ムンディ）論がでてくるだけのことではないか。そうおっしゃるかもしれません。

結論から申しますと、まったく逆です。在ることや、共に在ることの途方もない凄さ・祝祭性が、論証されてきます。まず、存在の無根拠性にそくしてのべます。

存在の無根拠性とは、万物が在ることにいささかも必然的な理由も起源も目標もないということでした。つまり、存在の非必然性（根本偶然性）ということです。

存在が非必然（偶然）だということは、《万物は無くてあたりまえ。無いことこそむしろオリジナル。在るなんてことがむしろ異様》、ということです。もし、なにかが存在することに、しかるべき必然的な理由や目標があるのなら、存在していることはごく当然なことになります。ですがが、そんなものが原理的にないというのが、存在の無根拠性ということですから、だから、在るなんてことは異様なこと、無いほうが理屈としては当然、いうわけです。

エントロピーの法則、つまり現代熱力学の第二法則からしても、この宇宙は壮大な死滅過程（エントロピー）。エントロピーこそ宇宙の〈自然〉であり、このように宇宙の片隅の地球の上で、当たり前のように燃焼運動が起こったり、新陳代謝されたり、生命が歴史を刻むなんてことは、絶対に「アンプロヴァブル（在りえないこと）」です。

しかしにもかかわらず、まぎれもなく現に、在るはずのない多種多様な事物事象が、だれしもの今ここの瞬間に、実っています。非在でも不思議ではないどころか、非在こそ理論的には当然であるはずなのにです。絶対に在りえないこと、在るはずのないことの実現を、「稀有」とか「奇蹟」と形容することはゆるされましょう。とすれば、なにかがこうやって当たり前のようにして《在ること》そのことは、じつは、極度に稀有で奇蹟的なことだという論理的な結論になります。在ることの、そのような意味での稀有性・奇蹟性・在りえなさを、一言で「存在神秘」と名づけることにしましょう。

先に、存在は底なしだから、なにか途方もなく根底的なことだといったのは、そんな存在神秘のゆえです。ハイデガーと同年生まれの哲学者ウィットゲンシュタインはそのことを、「この世が在ることが不思議だ。在るなんてこと

が在るってことが不思議だ」（Tagebücher, 1919. 10. 20）と記しております。あるいは、『論理哲学論考』ラストのあの有名な台詞、「世界がいかに在るかということではなく、世界が在るということそのことが、神秘的なことだ」（6.44）も、おなじことを語っているかと存じます。

さて、この存在の神秘性は、存在の念々起滅性をそこに重ね合わせますとき、何十倍にも、何百倍にも高騰します。つまりこういうことです。

存在が、刹那の念々起滅現象だということには、あらゆるものが、在化（ネグエントロピー）を兌換できず、いつ消失（非在）し切っても、不思議ではないことが含意されています。なぜなら、非在化を代価に在化が兌換される必然性など、「存在の非必然性」（存在する必然的で十分な理由なんか森羅万象にはないということ）から、ないからです。現に、毎日、この地上から一二万人の生命の炎が消え去ります。その数十倍の哺乳類と鳥類が消えています。そのまた数万倍の昆虫や植物が、そしてそのまた数万倍のバクテリアが消え尽くしています。ぼくたち人間もまた、存在する必然性がない以上、在りつづける理由も根拠も欠いているわけです。エントロピー論をかりていえば、存在したものは熱力学の法則によって、エントロピー化（つまり死滅・崩壊・衰退）が当然。存続したり新陳代謝を繰り返すことは、極度に異様な物理法則違反です。「生存するものの存在の各瞬間が、物理学的観点からみると、在りえないことなのである」（La Méthode. Tom I, p. 259）と、E・モランもいうとおりです。

とすればありうることはただひとつ。即座に解体し、散乱し、崩壊すること、つまり消滅だけです。ですが、すくなくとも今ここに、現に、膨大な森羅万象が生起し、エントロピーからの不断の逸脱、アンプロヴァブル（在りえなさ）への不断の登録が起こっています。在ることの稀有性・奇蹟性の思い、つまり存在神秘の思いは、この「いつ非在化し尽くしてもおかしくない」という論点によって、いっそう高騰するはずです。

五　存在論的遭遇性

もし以上のことにまちがいなければ、さらに、さまざまなものごとや人々が、こうやって今ここで《共に在ること（Mit-Sein）》の、とんでもない稀有性・在りえなさということが帰結します。ものみな非在でもありえた。むしろ非在が当然。どなたも親に頼んで生まれたわけじゃない。たまたま生まれただけ。また、いつ非在化し尽くしてもおかしくない成り立ちをしている。理屈のうえでは、いずれではなく、いますぐにでも、この地上から消えてしまってもおかしくはない。

しかしにもかかわらず、そんな〈在るはずも〉また〈出会うはずもない〉者同士が、奇しくも〈今ここ〉に、座を、時を、共にしていることは、言葉の真の意味で、奇蹟のようなめぐり逢いです。それをハイデガーはシックザール（存在論的遭遇性）と申します。

しかも、念々起滅なのですから、一瞬一瞬のその場その時の出会いが、どれもこれも永遠に、唯一一回きりの遭遇現象ということになります。ひらたくいえば、一瞬一瞬が最後の時にして、最初の出会いの時を、ですから世界の終わりにして世界創造の時を、だれしも、いつもつねに、どこででも生きているわけです。ハイデガーも敬愛した九鬼周造は、このことを「邂逅の驚異」と申します。つまり「逢わないでもあり得たものが逢ふ。それで驚異を伴う」というわけです（『偶然性の問題』）。

実際、ぼくが皆さんにお逢いする必然性も理由も、結局はありません。そもそもこの世にぼくたちが存在する理由がなかったからですし、存続しつづける必要もないからです。しかしにもかかわらず、こうやって――ただし安藤先生という機縁をえることで――在るはずもない、出会うはずもないぼくたちが、現に出会って、〈共に在る〉。これはとんでもなく不思議な、驚くべきことではないでしょうか。しかもいずれ消え去る、否、刻一刻消え去っているもの

どうしが、暫し、今ここで、時を座を共にしている。このような意味での〈共に在ること〉に思いを寄せるとき、慈しみとか、愛しさ、つまり今では死語と化した観さえある「慈愛」とか「愛」ということの正体を、お一人お一人で噛みしめることができるのではないでしょうか。

今進行中の現代哲学もまた、ニヒリズムの時代を越えてやっと、そんな大きな言葉を語ることができるようになったように思います。新しい時代のエチカ（もはや善悪という人間くさい尺度による旧倫理ではなく、共に在るという単純な存在論的事実にもとずく倫理）ということも、ここから展望できるかとも存じます。今日は、その一端をお話できたとすれば、よしとしなければなりません。

哲学の言葉は、どうしてもノロマで、無骨です。今日お話したかったことは、たんにある質朴な単純なことにすぎません。その機微を、プリント末尾にひきました小説の一節ほどよくつたえているものはありません。読ませていただきます。

「働きつかれた夕方などに、夕日が大都会の屋根屋根を明るく照らしているのを見ていると、突然、多くの勤人や労働者や主婦や電車の車掌が、まるであかの他人のように、お互いに知らん顔して、勝手に歩いたり、働いたり、叫んだり考えたりしていることが、何か信じられない不自然なことのように見える一瞬――そんな奇妙な一瞬を経験しなくって？　そんなとき、あなたは不意に、こう叫びたいような気持ちにならなくて？　《ああ、もうそんな他人じみた顔して暮らすのはやめましょう。どうしてそんなに他の人たちを無視してくらせるのでしょう。お互いに、ひとりぼっちで死んでゆかねばならないのに、どうして生きているというこの素晴らしい瞬間に、お互いに目をかわし、心のなかのやさしさで相手をかばい、慰め、心からのくつろぎを得ようとしないのでしょう》って……」

（辻邦生『廻廊にて』）

だらだらと、偉そうな口ぶりで話をしてしまいました。考えてみますと、浄土門の皆さんが、いちばん熟知なさっ

ておられること。世親『浄土論』に申します。「觀佛本願力、遇無空過者（遇うて空しく過ぐること無かれ）」とはそのことなのでしょうから。とするとぼくは、とんでもなく釈迦に説法の話、釈迦のたなごころの上の猿を演じたことになります。にもかかわらず、ご静聴ありがとうございました。